

岡本韋庵『日本維新人物志』訳註抄 (二)

目次

はじめに

凡例

訳註抄

夏偕復序

岡本監輔自序

一、大久保利通 二、川路利良 三、野津鎮雄 四、得能良介
五、大寺安純 六、坂本八郎太 七、中村敬宇

(以上 (一)、徳島大学国語国文学 23号、2010)

八、山岡鉄舟 九、清川八郎 十、美馬援造 十一、安井息軒
十二、木戸孝允 十三、岩崎弥太郎 十四、後藤象二郎

(以上 本稿)

(二) では岡本が絶賛して止まない山岡鉄舟、評価の分かれる清河八郎、同じ阿波藩の出身でありながら岡本がその名すら知らなかった美馬援蔵、幕末維新期の志士たちを育てた一人である安井息軒、広く名を知られながら『大日本中興先覚志』に収録されなかった木戸孝允・岩崎弥太郎・後藤象二郎の七名をとりあげる。

有馬卓也

八 山岡鉄舟(武蔵)

山岡鉄舟。名は高歩、字は猛虎。鉄舟は其の号。父を小野朝右衛門高福と曰ふ。飛騨郡代たり。世よ幕府に仕む。鉄舟は其の五男なり。年二十二、出でて山岡氏を嗣ぐ。幼きより槍劍術を好み、後に千葉周作に従ひ、撃劍の秘術を得て、一派を發明す。無刀流と曰ふ。春風館を設け、門生を教育す。終身懈ることあらず。又書を能くし、筆を走らすこと神の如し。其の人の為に書すること、幾億万葉なるかを知らず。明治元年戊辰、官軍討幕す。幕臣紛議洶洶たり。是より先、前將軍慶喜は士臣をして己の幽居して^{あやまち}愆^愆を念ふの旨を厳守せしむ。謂ふ「違ふ者あらば、猶ほ予に刃するがごとし」と。鉄舟往きて面し、其の赤心の他なきを知りて、曰く「公、憂うるなかれ」と。出でて人と謀りて曰く「予、單身もて大総督に謁し、國家の為に無事を計らんと欲す。若し途に予を殺す者あらば、是れ曲は彼に在り。百万の生靈に代りて、以て一命を^{なげう}抛^{なげう}つは、素より吾が欲する所なり」と。衆、之を危ぶみ、敢て賛する者なし。軍事総裁勝安房に胆略ありと聞きて、往きて之に告ぐ。安房雅^{もと}鉄舟の粗暴なるを聞き、頗る不信の色

あり。問ひて曰く「何の方法あるか」と。鉄舟曰く「官軍の我を縛せば則ち縛に就かん。我を斬らば則ち將に總督官に向ひて一言して以て其の探聴を請はんとす。其の言の聴かるれば、則ち吾当に一身を以て之に当らん。官軍豈に是非を問はずして人を殺さんや」と。安房大いに之を然りとし、其の請ふ所に従ふ。鉄舟家に帰るに、会たま薩人益満新八郎の来るあり。同に行かんと欲す。因りて之を諾す。急ぎ行き既に六郷河を渡れば、則ち官軍の先鋒の来り宿するあり。益満をして薩藩人と称せしめて行く。復た一人の支ぐ者なし。昼夜兼行して駿府に出づ。大総督府に抵り、参謀西郷隆盛に面するを請ふ。因りて之に問ひて曰く「先生は是非を問はずして進撃するか。果して然らば、則ち徳川の家臣は脱走して不軌を謀る者多からん。恐らくは慶喜も赤心を朝廷に徹するあたはず。僕、之が為に深く歎ず。故に来りて上言す」と。隆盛曰く「甲州既に開戦すと聞く。君の言と違ふことなきを得んや」と。鉄舟曰く「脱走せし輩の為す所にして、主人の知る所に非ざるなり」と。隆盛曰く「好し」と。復た其の他を問はず。鉄舟曰く「理非を問はずして人を殺すは、豈に王師と云はんや」と。隆盛曰く「進みて撃つを欲せず。朝廷、自ら寛典あり。恭順の実の何かなるかを顧みんのみ」と。鉄舟曰く「慶喜は決して朝命に背かざるなり。恭順の実は何如せん」と。隆盛曰く「郷に静寛院宮天璋院殿の使者あり。徒に恭順を陳べ、恐懼して去る。今、君に見ゆるを得ば、事情判然たり。請ふ君之を待て」と。乃

ち入りて總督官に告ぐ。之を頃くして營に帰り、五条の書を授く。曰く全城を交付せよ。曰く城中の人を従して向島に徙せ。曰く兵器を交付せよ。曰く軍艦を交付せよ。曰く徳川慶喜を徽前に保管す。鉄舟曰く「謹んで命を聞けり。唯だ第五条のみは徳川氏臣僚の堪えて聞かざる所なり。先生、数万の生命を絶たんと欲せざれば、則ち請ふ更に之を熟図せよ」と。隆盛、強いるに朝命を以てす。鉄舟曰く「請ふ地を易えて之を言はん。薩藩の賊と為り討を受くるに当り、此の朝命に接すれば、先生は其れ甘心して命を奉ずるや。僕意ふに先生は決して忍ぶあたはざるなり」と。隆盛黙然として良久しくして曰く「君の言洵に然り。予請ふ担ひて之に当らん。君憂ふるなかれ」と。議既に決す。隆盛、鉄舟に謂ひて曰く「君今官軍の營を破りて来る。理、当に縛すべし」と。鉄舟、縛に就かんと請ふ。隆盛笑ひて曰く「且に飲まん」と。数杯を傾けて別れを告ぐ。隆盛、路券を給す。乃ち急ぎ江戸城に帰り、之を参政大久保一翁暨び勝安房等に白す。慶喜、之を聞きて大いに喜び、坊市に頒告す。既にして隆盛江戸に達し、高輪の薩邸に入る。鉄舟と勝安房と往きて面し、之に兵を進むなかれと告ぐ。隆盛乃ち来り応接す。鉄舟護送し、左右を離れず。蓋し暴徒の変を為すを虞れ、同に死して以て約を全くせんと欲すればなり。明治二年、静岡県大参軍と為り、茨城県参軍に転ず。三年、伊万里県知事に任ぜらる。暴徒の蜂起するに遇ふも、忽ち之を鎮撫す。後に侍従に転ず。五年、皇城災あり。鉄舟、淀

橋邸に在り。変を聞きて、寝衣に袴を穿ちて参内す。火勢烈しく、戸を破りて入る。上、驚き喜びて曰く「鉄太郎、汝の来ることの何ぞ早きや」と。時に火氣は御背に達す。直ちに扈從して出づ。後に上奥州に巡幸す。皇后、以て憂ひと為す。上曰く「鉄太郎の在るあり。何ぞ憂へん」と。明治二十二年二月、疾に罹り、七月十九日、白衣して坐禪の形を為し、榻に乗り微笑して逝く。上と皇后と並びに金帛を賜ひ、谷中村の全生庵に葬る。官は皇后宮亮宮内少輔に至り、華族に列せられ、勲二等を叙せらる。鉄舟、嘗て佩刀を御座の側に奉じて以て玉体を護らしむ。没して後、嗣子の直記を召して、手づから還して之を与ふと云ふ。

論に曰く、鉄舟は幕末の偉人なり。其れ平生、客を好み士を愛し、門に奇節の侶多しと聞く。其の精藝は之を禪理に得。禪理果して其の效を呈す。是れ内外合一するなり。徒に其の心を死灰とし、寂靜不動なる者に非ざるなり。余嘗て往きて訪ひ、談じて晷を移す。木訥真率（註②）にして、絶えて堂堂豪傑の風なし。其の自得する所あるや知るべし。余嘗て酒井張甫を幕府の人物たりと謂ひ、鉄舟の友人石坂周藏をして鉄舟に告げ之を朝に薦めしむ。鉄舟之を然りとし、周旋頗る力む。其の言の行はれざるを以て遺憾と為す。余は阿州人にして、同郡の定光村に二劍客あり。一に曰く折目栄、一に曰く村上真五郎。皆に鉄舟の心友たり。栄は人と為り目光炯炯として精悍無比。張甫の畏るる所なり。幕府嘗て陸兵隊長と為す。後に落魄し、屢しば予の室

に入る。語るに風霜を挟み、人をして凜然たらしむ。嘗て栗子の功用を論じ、栗樹を全国に栽えて以て穀菜に易えんと欲す。其の言行はれず。鉄舟、心に之を慰む。終に之を如何ともするなし。老後は国に帰り、終る所を知らず。蓋し怒りて鳴門の海に投ずるなり。真五郎は鉄舟に於て尤も膠漆（註①）と称す。家貧しく乃ち請ふ所あらんも、一も臆かざるなし。栄之を異として曰く「是れ必ず異あるが故なり」と。其の妻は勝氏。安房の妹なり。嘗て佐久間象山に適き、象山の没後、真五郎に適く。夫婦市に住み、絃歌を以て生と為すと云ふ。

—註—

（①） ありのままで飾り気がないこと。

（②） 厚い友情で結ばれていること。

九 清川八郎（羽前）

清川八郎。名は正明、字は震志、号は楽水。羽前国東田川郡清河村の人、斎藤某の子なり。慷慨、気節あり。年十八、江戸に抵り、東條文蔵の門に遊ぶ。屈節読書し、旁ら槍術を学ぶ。遂に四方に遊ぶ。家素より豪富にして、千金を散じて志士と交はり、以大義を首唱せんと欲す。水戸の正党の勢頗る盛なりと聞き、往きて事を謀るも、与に為すことあるに足らずと謂ひ、乃ち去る。復た江戸に抵り、同志を糾合して、四十余人を得、将に横浜夷

館を火せんとす。其の徒皆大刀を佩して攘夷刀と曰ひ、濶袴を穿ちて脱藩袴と曰ふ。到るに豪飲放歌し、權要を罵詈雑言し、睡、眠、賦、^{が、い、さ、い、}〔註一〕せし者を斬る。遠吏の搜索の甚だ厳なるに會ひ、其の徒安積五郎と晦迹^{（註二）}して出でず。文久元年、京に上りて、中山忠愛に謁す。忠愛は大納言忠能の長子にして、忠光の兄なり。幼きより君側に侍するも、幕吏の疾忌するに遇ひて屏居す^{（註三）}。八郎進み説きて曰く「幕府の上に逼り位を譲らしめんと謀るを聞くが如きも、今に及びて因循して決せず。恐らくは臍^{ほそ}を噬^かむに致らん」と。忠愛深く之を憂う。乃ち相議して曰く「中川宮は賢明にして衆望の帰する所と爲るも、今は禁屏に冤せらる。苟も密旨を受け義士を募れば、則ち事必ず濟らん」と。因りて忠愛に告げて士を募らしむるを奉ずるの書を作らしめ、之を懷にして五郎及び薩摩の人伊牟田尚平と偕に鎮西に航す。筑前の平野次郎・筑後の真木保臣・肥後の宮部鼎藏・豊後の小河一敏等、素より幕府の専横を憤る。之を聞きて大に喜びて曰く「是れ千載一遇の幸なり」と。皆身を國家に致さんことを誓ふ。次郎は向に薩に入り、西郷・大久保諸子と交はり、又久光の人と爲りを知る。因りて与に俱に薩に入り、藩侯に見え、其の著せし所の『培覆論』を上す。侯、之を嘉みし、來春を俟^{まち}て事を舉ぐるを約す。八郎、是に於て志士を募り、志士雲合響應す。文久三年、八郎忠愛を薩に奉ぜんと欲す。五郎を留めて京に上る。幕吏の偵察の嚴を察^さむと聞き、同志と偕に大坂の薩邸に匿る。居ること何も

なし。久光に東上の期を逼る。次郎・保臣・一敏等、前後大坂に會する者、百有余人。各おの其の所見を異にす。八郎曰く「先に關白九條氏・所司代酒井氏を襲ひ、以て島津氏の至るを俟^{まち}つ」と。次郎、過激なりと謂ひ、敢て従はず。旋りて藩主の囚ふる所と爲る。已にして島津氏至り、八郎等の粗暴にして事を誤るを恐る。近衛氏に因りて、奏して釐下を鎮護せんと請ふ。遂に八郎等を辭せしむ。八郎乃ち去り、又江戸に如く。時に遊士嘯合し、動もすれば暴挙を逞^{たくま}しくす。幕府、之を收録して以て横暴を止めんと欲す。曰く「坊市を警備するに、新徴隊を京都に置きて、近藤勇を以て監督と爲し、新徴隊を江戸に置きて、八郎を以て監督と爲さん」と。而して江戸の隊士の本所の館に在る者一千五百人。馬喰町及び伝通院に在る者四五百人。暴戾なること故の如し。口に攘夷を藉りて、豪家に闖入し、財物を横斂して去る。衆の之を畏ること鬼神の如し。幕府更に酒井左衛門に命じて尉^{おさめ}めて之を統制せしむ。八郎、幕票を受けて監督と爲るを耻づ。謂^いらく「是れ丈夫の安んずる所に非ず。死を攘夷に決し、以て大名を傳かんと欲す」と。一日、党員某姓を訪ね、其の疾視せらるるや、遽^{はか}に告げて曰く「吾志士を合して攘夷を果さんと欲す。君宜しく与に俱にすべし」と。某愕然として曰く「幕府は斯の挙あるを恐れて、君をして監督せしむ。君にして此の如くんば、幕命を奈何せん」と。八郎笑ひて曰く「然るかな。大事を企図するに、何ぞ汝汝輩を要めんや」と。言未だ畢はらざるに、刀を

抜きて其の首を斫る。書を裁して之を止めて曰く「斯の人無礼なり。故に之を斬る」と。乃ち奔り潜匿す。幕吏之を聞き、以て謂らく「争闘して一人を殺すは、必ずしも晦跡あらざる。晦跡は殆ど故あるなり」と。密に人を従へて之を覘はしむ。則ち党を結びて横浜を襲はんと欲するなり。已に百余人を得。大いに驚き、捕吏を遣らんと欲す。捕吏謂ふ「吾が徒は十数人。安ぞ八郎に当るを得んや」と。因りて壮士の武芸に精通せし者を募る。佐佐木只三郎等三人を得。文久四年四月十五日夜、八郎松平山城守邸に至り、金子某を訪ぬ。談終はり帰り、芝瓦坊を過ぎるに、暗中に人あり。長槍を提げて八郎の脇背を鋭く。八郎躲閃（註4）して之を避く。大刀忽ち頭後より下り、右肩四五寸を斫る。八郎屈せず、刀を抜きて敵の膝を薙ぎ、更に一人の膝を斫る。一人あり、刀を揮ひて八郎の腕を断つ。八郎仆れ、敵沓（註5）し、遂に之を殺す。八郎呼びて曰く「何ぞ卑怯なるかな。奴輩」と。遂に絶ゆ。時に年三十四。八郎嘗て自ら肖像に賛して曰く「身を獨（註6）に発し、文を修め武を講ず。心は皇朝に存し、氣は夷虜を吞む。財を輕んじ士を愛し、慷慨自苦す。殺殺たる精神、落落たる面部。嗟乎奇なり、性の取る所」と。嘗て九州に抵りし時、密勅を奉ずと称して、小川一敏京に上り、後に其の偽たるを知りて、陰に之を責む。八郎曰く「大丈夫は天下を以て自任す。此等の權変なかるべからず」と。其の大胆なること想ふべきなり。

論に曰く、八郎は真に壮士なるかな。文久の初め、余江戸に在りて、遊士の横行するを目撃し、八郎の豪名を稔聞（註7）す。其の挙動の躁妄なるを咎むるも、明哲保身の士に非ず。而して幕吏の褊御の其の人を得ざるを歎ず。今より之を思へば、殆ど前日の事のごとし。自画の贊を觀れば、則ち其の之を外に発すること、天下に率先する者なるを知る。学問上より之を致せば、報国の精神に非ざるはなし。未だ躁妄を以て之を目するべからざるなり。

—註—

- (1) ならむこと。
- (2) 姿をくますること。
- (3) 世間から身を引いてひっそりと家にこもること。
- (4) 身をかかわして逃げること。
- (5) どつとおしよせること。
- (6) 賤しい身分のこと。
- (7) よく耳にすること。

十 美馬援造（阿波）

美馬援造。名は諧、字は和南、初め土仏と称し、入獄の後に号を桜水と改む。阿波国美馬郡重清村の人なり。鎌田某の男。家は世よ農を業とす。垂髫（註8）して仏弟子と為る。隣村の郡里村の

願勝寺に住す。好みて楞嚴・維摩等を読む。儒雅を喜び、史伝を渉獵す。兼ねて臨池（註1）・丹青（註2）・國雅・俳句を能くす。人と為り坦懷にして、城府を設けず（註3）、善く人と交はり、一たび締盟せば、則ち必ず始終を全うす。人の過ちを見れば、則ち肺肝を披きて之を規す。一裘一葛、蔬糲（註4）に自ら安んず。語忠臣義士等に及べば、輒ち流涕歔歔して、人をして感動せしめ、古今の君臣順逆の事に及べば、切齒扼腕して、己其の事に与かる者の如し。安政元年甲寅の秋、感ずる所ありて、緇流（註5）を脱し、飄然として四方を歴遊し、其の土風國勢を察し、広く奇傑の士を求め、長門の高杉晋作、土佐の坂本龍馬等と交はりて好し。丁巳冬、米艦浦賀に来泊し、海内騷然たり。天皇深く之を憂ふ。桜水大いに尊攘を唱へ、謂らく讃州の琴陵に四方人物輻輳の区を為らん、と。遂に金山巷に至り、一陋屋を賃して、筆耕硯田し、以て生計を営む。日下燕石・植田文郁等と詩酒交歓し、肝胆を吐露し、謀りて將に皇運を挽回せんとす。塵埃榻に満ち、厨下屢しば空しきも、毫も意と為さず。会たま高杉晋作・桂小五郎等の長門より来り、琴陵に寓す。旦夕過從（註6）し、概して虚日なし。晋作等の国に帰るに及び、文郁は長に入り、桜水は琴陵に留まり、時事を長に報ず。慶応紀元乙丑、辺警益ます急なり。桜水死を決して国に報ぜんとするも、幕府に疑忌せられ、燕石とともに簿に就く。爾後縲紲（註7）せらるること四年。苦楚万状たり。而るに

侃侃諤諤の気は、少しも挫屈せず。文を作り時弊を論難す。忠憤人をして感動せしむ。維新に及び獄を出づ。衆其の入りて大議に参するを望む。桜水慨然として劍を杖つき、將に燕石と京に上らんとするも、過たま疾に罹り、遂に果せず。爾後身体羸瘦（註8）し、英氣大いに衰へ、自ら其の為すべからざるを知り、帷を下して生徒に教授す。其の書を講ずるや、抗声飾弁を要せず、恂恂として談話し、人をして了解せしめて止む。詩を作れば雄建、自ら一家を成す。其の「楠公識文を読むの図に題す」に云ふ「識文讀みて数行分明に興亡を示す聊か鬼神の説を借り士人の腸を感激せしむ偉なるかな一時の策居然として金剛を保つ」と。以て出づる所の抱負を想ひ知るべきなり。其の書は結体にして飄逸、以て氣韻（註9）に勝る。明治七年七月、痼疾（註10）再発し、二十七日遂に没す。終るに臨み胸を拊て大息して曰く「男兒屍を盛るに、馬革を以てせず。而して枉席の上に浪死するは、真に愧づべきなり」と。絶命国詩一首を賦して乃ち瞑す。享年六十有三。

論に曰く、桜水は殆ど阿波の逸民なり。余も亦阿人にして、世よ美馬郡三谷村に住す。重清と相距たること二里なるべし。重清の人美馬新藏は幼くして神童と称せられ、古賀精里に従学し、篠崎小竹・野田笛浦等と名を斉しくすと聞く。往きて之を訪ふこと再三なるも、未だ桜水あるを聞かず。余の叔祖母の家は西讃に在りて、琴陵に近し。因りて屢しば往きて琴陵に来り、

藤川三溪の名あるを聞き、往きて焉に従ふ。三溪、名は忠猷、字は伯孝。学は物徂徠を宗とす。其の祖の東園より、名を西讃に著はし、三溪に至りて益ます博覧強識と称せらる。人となり豪邁不群にして、目光は炬の如し。好みて字内の形勢を談ず。余其の弛むを斥くるの儒行に類せざるを諷し、傲然として曰く「敬ひ、踞ひざまづきて拳を曲げ、縄墨に拘拘たるは、大丈夫の爲に非ざるなり」と。余服せずして去る。此の如きこと三次。当時、燕石の榎井村に住し、賭博に匿るるも、頗る詩名あるを聞き、嘗て刺〔註1〕を投ずるも見ゆるを得ず。其の後、三溪盛に尊攘説を唱へ、高松の獄に繋がるること六年。『春秋大義』等の書を著はす。余は北陸に在りて其の状を悉く得ず。維新の際に及び、燕石に西京の鴨東の某様に見え、三溪の赦され王事を鞅掌すと聞く。而して燕石も亦將に総督官に随ひて越後に赴かんとす。談晤して畧を移す。亦未だ桜水あるを聞かざるなり。十数年前に及び、会たま郷友三宅玄達が「桜水に寄するの墓表〔註12〕」を郵し、余をして之を評せしむ。且つ曰く「桜水は新蔵の門人たり。維新の際、隣邑脇町の人、將に之を聘して以て学校教長と為さんとす。因りて屢しば郷に帰り、嘗て弊廬を過さる。今、朝廷の將に其の功を議して従五位を叙せんとするを聞く」と。是に於て、余故山に人あるを喜ぶ。而して小島某の『勤王伝〔註13〕』の桜水の事蹟を叙するに拠りて、則ち他県人も亦其の功を記す者あるを知る。而るに余の焉を記せざるは、何ぞ其

の疎漏の甚だしきや。蓋し余の幼き時に当り、阿波全国を挙げて復た勤王を言ふ者なきが故に、余之を知るを得ざるなり。余が郷に劍客佐藤平馬あり。嘗て江戸に抵り、岡田十松の門に遊ぶ。後、水戸諸國に遊ぶ。常に高木履を著け、往来すること数百里。平常客と高談するを好み、余が帰郷する毎に、招かれて其の家に飲み、共に四方の事を談ず。余が開拓に官たるに及び、余に請ひて推薦して朝臣と為らしむ。微勞ありと謂ふ。近く水戸藩士住谷悌之介信の行状を聞す。曰く「信は諸藩に尊攘を勧めんと欲す。万延中、諸藩を歴遊し、淡路に渡り、稻田氏の臣佐藤平馬の家を主とす」と。淡路に此の姓名の人なし。蓋し余の郷は本稻田氏の采色に係り、平馬は其の世臣たるが故に誤るなり。余未だ同郷の先輩を知らず。焉くんぞ他郷の人を知らん。今阿州に勤王なしと謂ふは、亦唯だ私言なるのみ。桜水のごとき者ありて、之を知らざるは、何ぞ其の疎漏の甚だしきや。玄達、号は舞村、医を業とす。余に先んじて岩本贅庵に師事し、後に京阪に抵り、梁川星巖・広瀬旭窓等の門に入る。吟哦を好み、高潔にして士を愛す。余幼きより其の知る所と爲る。今に至りて衰へず。亦奇男子なり。

—註—

- (1) 書道のこと。
- (2) 絵画のこと。
- (3) 人と接する時に、警戒心やわだかまりを持たないこと。

- (4) 野菜と玄米。粗末な食事のこと。
- (5) 僧侶のこと。
- (6) 訪問すること。
- (7) 牢獄に繋かれること。
- (8) 疲れて瘡せている様。
- (9) 詩文や書画などの気高いおもむきのこと。
- (10) 持病のこと。
- (11) 名刺のこと。
- (12) 三宅舞村「美馬桜水翁碑」については、竹治貞夫『阿波碑文後集』(私家版、昭和六〇)に収められている。
- (13) 小島功一『王政維新 日本勤王篇』(田中宋栄堂、明治二四)。本書は五九〇頁に及ぶ大冊であり、収録された人物は一三九名である。

十一 安井息軒(日向)

安井息軒。名は衡、字は仲平、息軒は其の号。又半九子と号す。飢肥藩士なり。父は朝完と曰ひ、滄洲と号す。学行を以て聞かる。息軒は其の二子なり。長は六尺に満たず。面に痘痕あり。弱冠にして江戸に遊び、昌平黌に入りて、松崎慊堂に師事す。苦学すること等輩に過絶す。居ること三年、学成り郷に帰る。闔藩敬信す。戊戌の歳官を辞し、家を挈ひきげて復た江戸に入る。学殖益します深く、名声愈いよ頭らかなり。弘化・嘉永の間、外客屢しばしばし

ば来り窺ふ。慨然として之を憂え、『海防私議』一卷を作り、製艦・鑄砲・築堡・蓄穀等を論ず。世人、諸これを老泉(註1)の勢を審らかにし敵を審らかにするに比す。水戸侯徳川景山之を聞き、其の臣藤田東湖をして就きて時事を問はしむ。幕府、擢おこんで昌平黌の儒員と為す。維新の時に方あたり、徴せらるるも起たず。某親王の召して経を講ぜしめんとするも、辞して曰く「西方の鄙人にして、礼節を習はず」と。家居して教授し、斯の道を以て自任す。嘗て一生の来りて欧米共和政治の美を説くものあり。息軒之を非とし、尋いで又絶交書を与ふ。其の中に言ありて曰く「共和は天下に君なく、相共に政を為すの謂ひなり。若し必ず之を皇朝に行はんと欲せば、主上を何れの地に置くかを知らざるなり。伝に曰く「君・親には将にせんとするなし、将にせんとすれば、而すなはち之を誅す(註2)」と。夫れ廢立は何等の事か」と。今や公然として之を学館に唱ふ。而して之が師と為る者は、亦之を禁ずるを知らず。赤族(註3)して以て其の罪を償ふに足らず。寧ろ其の是非を問ふに暇あらんや」と。晩に眼を患ひ、書を見るあたはず。子弟の為に国字書を著はす。『唾余漫筆』と曰ふ。言ありて曰く「童子を教ふるは、唯だ行儀を正し、孝悌忠信の道を講習するを以て要と為す。故に古者は学校の多きを尚ぶ。若し徒ただに字を知り物を識を以て学問と為し、孝悌忠信の道を教へずんば、則ち驕慢日に長じ、男子は君父長上を敬はず、婦人は舅姑良人を軽んじて、皆内外の常務を廢し、

終に其の一生を誤る。苟も此の如くんば、則ち学校林の如しと雖も、損ありて益なし。汝輩異日若し教師の職に居らば、慎んで此の意を失することなかれ（註4）と。息軒は篤く信じて古を好み、經史を鑽研し、心を漢唐の注疏に用い、參するに衆説を以てし、考ふるに精核に抛り、能く先儒の未だ発せざる所を發す。文を作るに法を唐宋に取り、上は秦漢に溯る。古色蒼然として、筆力扛鼎（註5）なり。初め昌平黌に入るや、衆其の狀貌の寢陋（註6）なるを視て之を侮るも、其の論を聞き其の文を見るに及び、則ち皆歎じて服す。旁に算數に通ず。嘗て曰く「聖門六經（註7）、數は其の一に居る。經國行軍、之に由らざるはなし。近世の學者は、性命を高談するも、曾て二五の十と爲るを解せず」と。流れに沿ひて源を計るに、宋儒は其の責に任ぜざるを得ず。居常洋數を痛排するも、然れども天文・地理・工藝・算數に至りては、則ち往往にして參して洋説を取る。晚白川代官に任ぜらる。吏胥の來賀すること、華服燦然たり。各おの酒饌を齎して至る。息軒垢衣弊袴して、之を延べ与に碁局を對し、饗するに疎糲を以てす。吏胥愧赧して去る。未だ任に赴かずして邑俗奢を去り儉に趨ると云ふ。年七十八にして終る。著書甚だ多し。

論に曰く、息軒は近代儒者の巨擘なり。維新に際し、徴せらるるも起たず。豈に老病と云はんや。殆ど輕薄小兒と伍するを欲せざるのみ。其の「絶交書」に共和政を駁し、『睡余漫筆』に

孝悌忠信を陳べて政教の大本と爲すを觀るに、純平として孔門の宗旨たること、万世易はらざるなり。人文昭明の実、此に外ならず。而るに世人は諸を忽にす。末学に纏縛し、邪説に惑溺し、外美を侈言し、敵勢を誇示す。色の重き者を取りて、礼の輕き者と之を比すれば、鬼域の群に出入し、千百の戦乱を経歷すと雖も、自ら其の爲に計を失するを知らざるなり。豈に悲しからずや。

—註—

(1) 宋の文人蘇洵のこと。

(2) 『春秋公羊伝』莊公三十一年による。君主や親に対しては殺害しようと思っただけで罪であり、誅殺せねばならない、との意。

(3) 一族を皆殺しにすること。

(4) 『睡余漫筆』卷三に「童学の中は唯行儀を正し、長老を敬ひ、孝悌忠信の行ひを講習するを要とす。故に古へは学校多きを貴びし也。若し物を識るのみを學問と心得て、孝悌忠信の道を教へずんば、驕慢の心のみ長じて、男子は君父長上を敬まはず、婦人は夫舅姑を輕んじて内外の務めをも廢し、終に一生の害を招くべし。学校林の如く多く殷くるとも、損ありて益少し。汝輩他日大官と爲ること能はずとも、教師の職に加はることはあるべし。務めて此心得を失ふべからず」とある。

(5) 力強いこと。

(6) 背が低く顔かたちの醜いこと。

(7) 古代中国において士以上の必修科目とされた礼・樂・射・書・御・

数の六つの技芸をさす。

十二 木戸孝允（長門）

木戸孝允。号は松菊。山口藩士なり。本の姓は和田氏。桂某の養子と爲る。称は小五郎。幼くして驕悍度なきも、母を喪ひて始めて悔悟し学に就く。藩士吉田松陰に兄事す。東遊して剣法を斎藤弥九郎に受け、江川太郎左衛門・勝麟太郎等の門に入出す。其の藩營有備館の都講と爲る。元治紀元甲子秋七月、長人兵を輩下に率ぐ。兵敗れ、孝允は地に身を置くとくなく、三木木坊の女侠岡部某の匿す所と爲る。丹波に逃げ、姓名を変へ、木戸準一郎と称す。後に岡部氏を納れ妻と爲す。山口の俗党の平げらるるに及び、藩主孝允を召して大監察と爲す。孝允村田蔵六を挙げ、兵政を革定せしむ。是の時に方り長人薩と隙あり。土州藩坂本龍馬、為に之を和解せしむ。孝允京師に抵りて解説し、和乃ち成る。戮力もて復古に従事す。慶応三年丁卯冬十月、大將軍徳川慶喜公大政を奉還す。明年明治紀元正月、孝允徴せられて総裁局顧問と爲り、尋いで参与と爲る。国に帰り、天下の大勢を察し、謂く「方今諸侯其の地を割拠し、兵を養ひ力を蓄ふ。王政を称すと雖も、其の実なし。此の如くんば則ち奸雄の踵起するを奈くともするなきなり」と。窃に藩主に説き、版籍を奉還せしめんとす。藩主黙然として焉を少くして曰く「善し。汝

善く之を為せ」と。孝允感泣して退く。藩主急ぎ起ちて之を呼び、謂ひて曰く「我既に之を諾す。然れども今大戦の余ありて、士氣激昂して戡め難し。若し輕易に此の説を發せば、恐らくは変生ずるも測られず。宜しく時機を視るべし」と。孝允歎歎して曰く「謹んで命を奉ず」と。東京に至り、参与大久保利通に見え、談其の事に及ぶ。利通大に之を然りとす。二年、参与を罷む。朝廷其の功を賞し、禄千八百石を贈り、従三位に叙す。三年六月、参議に陞る。四年、廢藩令を海内に頒す。六年、征韓の議起り、参議西郷隆盛・副島種臣等は之を主張し、孝允は之を痛排す。隆盛等、職を辞して去る。又征台湾を議す。孝允、又之を排し、職を辞して国に帰る。八年九月、朝鮮我が軍艦を砲撃す。問罪の議又起る。孝允、上書して躬ら其の事に任じ之を弁理せんと乞ふも、疾に罹りて果せず。参議を罷む。内閣顧問に任ぜらる。九年、車駕孝允の染井別邸に幸す。世人以て榮と爲す。六月、鷹鷲〔註一〕して東巡し、地方の衰残を察知す。代議政体を立て、以て地方自治の制を治くせんと欲す。十年、西京に扈從す。時に西郷隆盛兵を挙げて反す。孝允、西京に駐蹕し、自ら征討の任に当らんと乞ふ。大久保利通の東京より至るに会し、事を論ずるも合せず。大いに争ふ。既にして疾復た大いに作る。天皇臨問し、勲一等を叙し、旭日大綬章を賜ふ。一日大呼して曰く「隆盛、盍ぞ休めざる」と。遂に瞑す。実に五月二十六日なり。享年四十四。正二位を贈られ、金若干を賜はる。西京東山に葬らる。

孝允は人と為り温厚にして閑雅。親戚故旧に篤く、毎朝考妣の木主〔註2〕に拝し、死に至るまで廃せず。妻は岡部氏、子なし。来原某を養ひて嗣と為す。

論に曰く、徳川氏既に大政を奉還せば、則ち諸藩も亦安くんぞ其の版籍を奉還せざるを得んや。然れども大臣其の宜しきに非ざるを措置せば危うし。孝允は之が為に心を区処に尽す。其の徳は諱るべからざるなり。親旧に厚く、考妣に拝するは、固〔まこと〕に君子従政の本たり。亦恐らくは諸公の及ぶ所に非ざるなり。

―註―

（1）天皇の乗り物に付き従うこと。下の屬従も同じ。

（2）父母の位牌。

十三 岩崎弥太郎（土佐）

岩崎弥太郎。名は寛、号は東山、弥太郎は其の通称なり。父は弥次郎と曰ふ。母は小野氏。世よ土佐国安芸郡井之口村に住す。幼くして学を好む。年十四、藩主養徳公に見え、詩を賦して以て献す。公、之を歎賞し、金若干を賜ふ。遂に高知に留まり、岡本量浦の門に入る。安政五年己未、江戸に抵り、贅を安積良斎に執る。明年、父の村吏の誣する所と為りて禍に罹るを聞き、昼夜兼行して郷に帰り、直ちに郡奉行庁に詣り、父の冤を訴ふ。聴かれず。怒りて庁門の柱に大書して曰く「官は賄賂を以て成り、獄

は愛憎に因りて決す」と。奉行怒り、削り去らしむ。弥太潜在庁堂に大書すること初めの如し。奉行益ます怒り、更に弥太を捕へて鞫問す。弥太毅然として曰く「某の書きし所なり」と。因りて之を罰して、城下に到るを禁ず。乃ち徒りて神田村に居り、門を杜ぎて読書す。是より名漸く顕はる。後藤象次郎・坂本龍馬等と交はり、尤も吉田東陽の知る所と為る。東陽は藩の碩儒なり。安政五年、藩命を奉じて長崎に之き、外国の事情を採訪す。慶応三年丁卯、再び長崎に之き、通商事務を管どる。遂に朝鮮に航し、帰りに少参事に任ぜられ、専ら會計を掌る。時に藩船は費用多く、殆ど支ふべからず。弥太の計画に委ねらる。乃ち九十九商会を創め、藩船を以て通商に供するを定む。遇たま事ありて之を藩に還し、以て軍艦に充つ。明治四年に至り、藩を廃し県を置く。乃ち官を辞し、商会を解し、船舶を還す。而して其の得し所の金は数万円。悉く焉を還納す。更に船舶数艘を藩庁より贖ひ、汽船運漕の業を創む。号して三菱会社と曰ふ。七年甲戌、佐賀の兵起り、朝命を奉じて庶物を運漕す。既にして台湾の役起り、朝廷、汽船数艘を贖ふに、以て弥太に委ぬ。十年の西南の役に、又朝命を奉じて運漕を掌る。役罷り、其の功を賞せられ、勲四等を叙せらる。弥太感激し、益ます海運を講ず。是に於て本邦航海の権は、全く其の掌握に帰す。暴に富み陶・猗〔註1〕を過ぐ。其の飲食は、山海の珍味を羅列す。一日、午餐喫鼓して、歎じて曰く「天下の食物の美なるものは、米穀と生豉〔註2〕と

に如くはなし」と。殆ど晋の何曾〔註3〕の一たびに食費万錢にして、還箸を下す処なしと言ふ者と相近し。十八年、疾発す。二月六日、従五位に叙せらる。明日遂に没す。年五十一。病革〔註4〕の時、大声もて曰く「東洋の男児、侍者喫驚す〔註5〕」と。言はんと欲する所を問はば、曰く「東洋の男児にして、平生の画する所は、未だ十の二三も成らず。嗚呼已んぬるかな」と。乃ち瞑す。弥太は人と為り豁達にして、儒学を好み、人倫に厚く、克く艱難に耐え、喜びて人の急を周ふ。往往にして万金を擲ち、毫も吝色なし。朝廷之を賞するに、前後数十次と云ふ。論に曰く、弥太郎は東洋の男児なるかな。明治十四五年の間、嘗て漢学の耆宿〔註6〕を会し、大いに盛宴を開く。余も亦焉に与かる。辞に曰く「事業稍暇あれば、聊か諸先の高風に接し、以て旧日の情素〔註7〕を叙せんと欲す」と。其の弟弥之助等と、送がはる出でて献酬し、侑むるに名妓を以てし、談笑して樂しみを尽くす。客帰るに、之を送るに車を以てす。余、其の言の謙にして礼の厚きに感ず。当時余は諸子に説きて、斯文学会を創む。弥太郎之が為に一万金を寄す。金は現存するも学校は振はず、人をして愧死せんと欲せしむ。古人の所謂「親に順ならざれば、朋友に信ぜられず、朋友に信ぜられずんば、上に獲られざる」者なり〔註8〕。弥太郎は其の義を知る。宜なるかな、其の能く大業を成就するや。

註

- (1) 陶朱公と猗頓のこと。ともに春秋時代の富豪。
- (2) 納豆や味噌のこと。
- (3) 魏の武帝に仕えた。本エピソードは『晋書』何曾伝に基づく。
- (4) 危篤状態のこと。
- (5) おどろくこと。
- (6) 学徳のすぐれた老人のこと。
- (7) 真情のこと。
- (8) 『中庸』(第十章)に「下位に在りて上に獲られざれば、民は得て治むべからず。上に獲らるるに道あり、朋友に信ぜられざれば、上に獲られず。朋友に信ぜらるるに道あり、親に順ならざれば、朋友に信ぜられず。親に順なるに道あり、諸を身に反りみて誠ならざれば、親に順ならず。身を誠にするに道あり、善に明らかならざれば、身に誠ならず」とある。

十四 後藤象次郎(土佐)

後藤象次郎。名は元燁、高知藩士なり。幼くして穎悟、長ずるに及び豪邁不羈なり。藩主山内豊信、擢んで機務に参せしむ。時に海外の各国、交こも来りて互市を請ひ、国内の人情鼎沸す。象次郎慨然として尊王の志を懷き、広く諸藩の志士と交はる。藩士の佐幕を主とする者は、睨睨として〔註1〕。胥ひ讒

るも、毫も意と為さず。坂本龍馬は其の才力の以て一世を籠絡するに足るを以て、人に語りて曰く「我、豪傑に接すること多し。畏懼する所ありて、放言するあたはざる者は、前に武市あり、後に後藤あるのみ」と。慶応三年丁卯、容堂、象次、郎をして將軍徳川慶喜に説かして曰く「天下の大勢、此に至る。太政を奉還し以て恭順を表すにしかず。然らずんば変の生ずるも測られず。請ふ之を熟慮せよ」と。慶喜、持重して答へず。説論すること再三にして、乃ち奮いて曰く「殿下、若し臣の元を容れずんば、臣請ふ、鮮血を以て殿下を汚さん」と。意色甚だ厲し。慶喜遂に其の言に従ふ。復古の業、是に於てか決す。明治元年正月、朝廷徴して参与と為す。四年、参議に拜せらる。六年、議事、協せず。西郷・板垣・副島諸氏と挂冠〔註〕勇退す。是より先、板垣・副島二子と議し、民選議院を設けんと欲す。上書して曰く「伏して惟みるに、今日、国勢を振起するの道は、唯だ天下の公議輿論を聴くに在るのみ。其の法は民選議院を設立するにしくはなし。果して然らば則ち朝野安寧にして、並びに無休の福祉を受けん。夫れ民は既に義務ありて租税を納るれば、則ち必ず權利ありて議政に参せん。是れ天下の通義、万国の公論なり。臣等竊に謂らく、正理の在る所は、有司と雖も之に抗ふを得ず、と。然るに之が説を為す者曰く「我が国民は不学無識にして、未だ開明の域に達せず。今議院を設くるは、早計に過ぐ。然らば則ち宜しく民をして学且つ智あらしめ、然る後に議院を設くべきなり」と。

殊に知らず、民をして学且つ智あらしめんと欲すれば、則ち宜しく先づ其の義務・權利を保有せしめ、振起して其の天下と憂樂の情を共にし、以て天下の事に参与せしむべきを。是の如きを審らかにせば則ち人民に豈に其の固陋に安んじ、不学無識に自ら甘んじ、己の權利を度外視する者あらんや。且つ政府の識は、宜しく以て標準と為す者を奉じて、人民をして活潑勇為の精神を奮起せしむるに在り。以て分ちて天下各般の義務を任じ、必ず民選議院を立てて、其の議政に習熟するを待ち、然る後に方に其の效を見るのみ。臣等既に天下の大勢に就きて之を究し、我が国今日の情勢に就きて之を徴す。切に謂ふ、天下を振起するの道は、唯だ民選議院を設け、公議輿論を宣達するに在るのみ、と。尋いで議院の説を唱ふる者は、踵を接して起ち、演説に于て、新報に于て、到る処に論難して措かず。各地に群衆す。賢才を推して代表と為す者、輩下に造り、或は大臣の門に趨候し、或は元老院に籲告す。上其の人心の向ふ所を察し、天下に勅して、二十三年を期して国民議會を開設するを定む。是れ十四年十月十二日たり。而してを首唱せし者は、実の後藤氏と云ふ。既に挂冠して去り、民間の事業に従事す。其の功頗る大なり。二十年、上其の功を賞し、華族に列し、伯爵を賜ふ。二十一年、伯東北に行き、大同団結を唱へ、政党を振起せしむ。世人皆謂ふ「伯は復た敢て軋ち仕途に就かじ」と。二十二年、俄にして逋信大臣に拜せらる。時人、其の進退の人の意表に出づるに驚く。三十年八月

四日、病にて終はる。享年六十有七。嘗て無題の作ありて曰く「天下の大権は王室に帰す、百年の霸業は一朝に亡ぶ、国の基一たび定まるは是れ誰の力ぞ、人間に付与す夢一場」と。蓋し伯自らを道ふなり。

論に曰く、伯の才略は、択へ摸むべからず。是れ自ずから伯の独得に属す。予嘗て其の心友数人を識り、熟つら其の風を聞くも、未だ嘗て往きて見ゆるを得ず。蓋し裨益を伯に受くるを欲せざるなり。陸奥宗光は其の人の才識の敏捷なること、伯と相近し。余其の父兄を識りて、遂に宗光を識るを得。其の顕榮するに及び、遂に復た往きて見えず。亦猶ほ伯のごときなり。民選議院は、洵に今日の人情に適ふ。而るに其の弊の在る所を言はず、徒に妄男子をして上に抗ひ衆に媚びしむ。横議已まず、勢に徇ひて産を破り、風俗を濁乱し、今に至るまで大效を得ず。亦惜しむべきのみ。

—註—

(1) ぬすみ見ること。

(2) 「桂」を原文は「桂」に作るが文意により改めた。桂冠は官職を辞するの意。